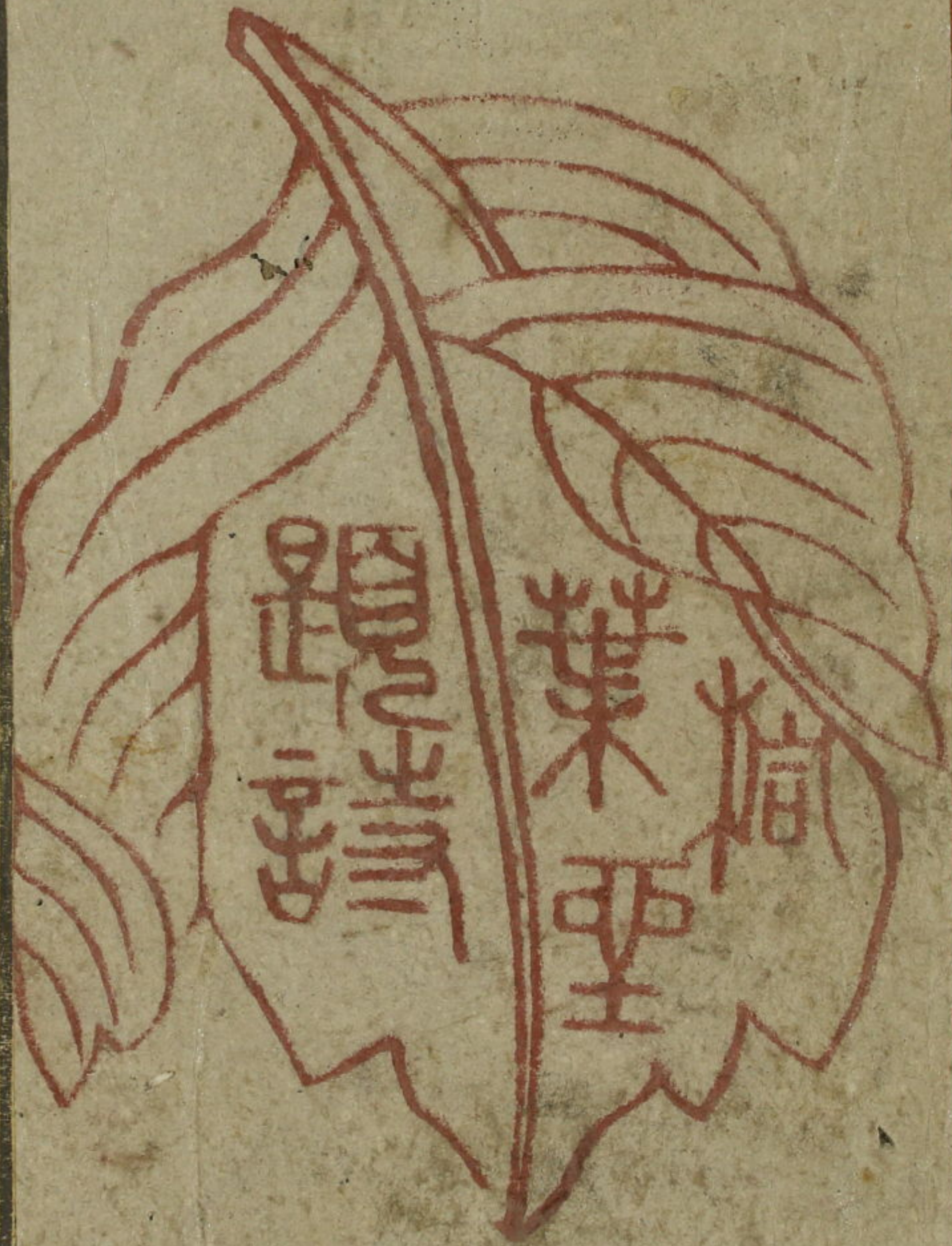




昔語質屋  
庫卷之二

初篇



~ 13  
3394  
2



吉野屋庫卷之二

昔語質屋庫卷之二

東都

曲亭馬

琴原九年  
二月二日  
小田野  
女長  
女長  
女長  
女長

第三

曾我十郎衛乃小袖

忘れ羊を... 友切丸の言擇と... 曾我十郎衛乃小袖... 虎が夫の像見と... 佛堂の柱に掛彩る... 日向あ... 今様小袖八丈絹の... 標縹紋の簪又帽額の外小模様... 綾... 五郎どの衣裳といへ... 蝶を... 蛇小口を添...

六十二...



八丈の嶋絹やまのしるしの作りどらねの尾張國おわりを織オリ出デす。そのまじり。まじり八丈ある。  
 余あまは八丈絹やまのしるしと唱なり。らんが治ち美み五年五月の由よし十郎藏じゅうざう人行家ぎやうけが。行ぎやう  
 國くには屯とんして伊勢いせ二所ふたところの大神宮おほいみへ送おくる奉ほうる御幣物みひつもの。美紙みし十帖じゅうしふ八丈絹やまのしるし二  
 匹ふたとあり。東鑑とうかん二ふた美紙みしの今の美濃紙みのしも。八丈絹やまのしるしの尾張おわりの名物ななつもの。二河ふたがわより  
 鄰となりる國産くにのうぶあり。又時宗ときむねどのの衣裳いせうも。蠶こゝろをつけ。の當あた初はつめの小説せつ作さく  
 者しやが滑稽こわい音ねあり。河津かわづも曾我そがも藤原ふじわらあり。平へい氏うぢの家の紋いりと。蠶こゝろ  
 をばくべん。うらひり。たど時宗ときむねどのの時政ときまさの鳥帽とりぼうしも。曾我そがも。蠶こゝろ  
 つ。彼かの北條きたじょうの家の紋いり。三鱗さんりんより。姓なづなは平朝臣へいあそみあり。その家を  
 めりの牙縁はなえんをつと。そを蠶こゝろをつけたる。その鱗りんをばくべん。蠶こゝろ  
 蠶こゝろをつと。はか又また所以ゆゑあり。北條きたじょうの鳥帽とりぼうしも。曾我そがも。蠶こゝろ  
 時宗ときむねどのの鱗りんをつけた。うらひり。平氏へいうぢなる北條きたじょうの蠶こゝろの元もと未み由よし

ある。紋いり蠶こゝろは徳とくの對たいも。昔むかしの作者しやうしやのうらひり。たど時宗ときむねどのの鳥帽とりぼうしも。曾我そがも。蠶こゝろ  
 り。又また朝夷あその鶴つるの紋いり。小林こばやしと稱なづなする。昔むかし初はつめ朝夷あそ小こ拾しやくたる能のう  
 優うが。紋いりより別号べつごうあり。うらひり。たど時宗ときむねどのの鳥帽とりぼうしも。曾我そがも。蠶こゝろ  
 といふ。うらひり。たど時宗ときむねどのの鳥帽とりぼうしも。曾我そがも。蠶こゝろ  
 の舌長しつなと笑わらひあり。うらひり。たど時宗ときむねどのの鳥帽とりぼうしも。曾我そがも。蠶こゝろ  
 おと。うらひり。たど時宗ときむねどのの鳥帽とりぼうしも。曾我そがも。蠶こゝろ  
 うらひり。たど時宗ときむねどのの鳥帽とりぼうしも。曾我そがも。蠶こゝろ  
 原源はらげん太たうらひり。たど時宗ときむねどのの鳥帽とりぼうしも。曾我そがも。蠶こゝろ  
 の虎とらのひら。時宗ときむねどのの鳥帽とりぼうしも。曾我そがも。蠶こゝろ  
 うらひり。たど時宗ときむねどのの鳥帽とりぼうしも。曾我そがも。蠶こゝろ  
 をい。作者しやうしやのうらひり。たど時宗ときむねどのの鳥帽とりぼうしも。曾我そがも。蠶こゝろ

将ハ曾我兄弟が仇殺の夜黄瀬川の龜鶴りろろの工藤祐隆が井ま  
の狩屋小作りろ。吉備津宮の大森内ホ。酌をとらる。杯をとる。其後  
あつらひて臥せりしが。彼胞兄弟が。雙言敵祐隆を殺せり。と噂が声よ  
發した。覺え。夜討入りぬと叫びつ。あつらひて人よ告ぐるりのなり。ま  
祐成りか。虎よ相馴し。とりあひて。慥ある。證文作り。虚言や。あつら  
ねども好色りのと。あつらひて。違へ。王兄の九ツ牙の僅小七歳と。はえ。ろろ  
とり。父の仇人を殺さん。と。首小弓小木刀めて。無初の手を拵ひ。すも。  
らるる。そのみどい。忘れ。推き。と。た。ふ。あ。の。如し。況て人となり。ろ  
色を好。優小拵果小拵。び。た。つ。れ。揚代。か。さ。け。す。り。て。家傳の。遣  
逆澤返を。質。置。虚。気。りの。祐成。あ。ら。ろ。ろ。い。を。大敵を。替。ゆ。い。ん  
せ。小。の。曾。我。の。逆。澤。返。い。の。ろ。ろ。い。び。う。ん。遣。ま。あ。ら。ろ。ろ。胸。二。段。白。糸

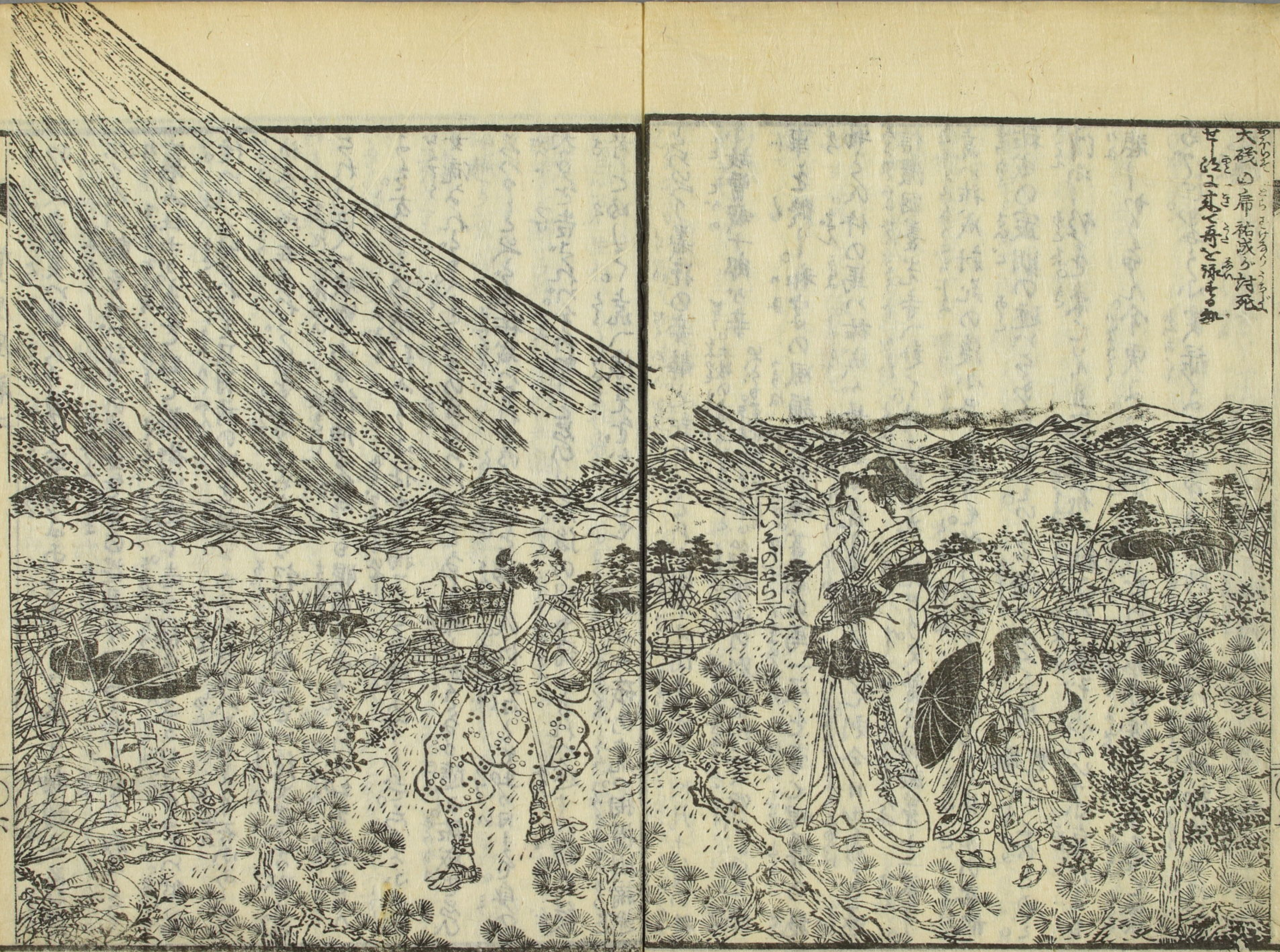
も。ぐ。外。の。萌。黄。糸。ま。威。を。澤。深。威。の。遣。と。り。白。の。澤。深。海。の。花。小  
象。を。萌。黄。の。と。あ。ら。ろ。ろ。紫。の。色。と。又。何。ま。う。れ。拵。の。糸。を。萌。黄。や。て。  
毛。を。水。色。小。威。を。と。あ。ら。ろ。ろ。と。唱。た。る。と。古。老。の。説。小。妻。威。と  
い。の。様。子。澤。深。威。の。み。ま。と。妻。を。割。り。懸。た。と。逆。澤。返。の。い。の  
ぞ。め。あ。ら。ろ。ろ。又。世。間。小。逆。澤。返。い。あ。ら。ろ。ろ。あ。ら。ろ。ろ。その。東。屋。い。ち。ま  
り。ら。と。拵。傳。ろ。ろ。と。り。あ。ら。ろ。ろ。の。い。の。夢。あ。ら。ろ。ろ。い。の。い。ん。理。外。幻。境。あ。れ。祐。成  
が。花。街。の。ひと。と。情。慾。の。海。ま。う。れ。を。こ。つ。作。と。あ。ら。ろ。ろ。作。を。な。べ。い。こ。と  
ら。の。う。へ。を。い。ろ。ろ。あ。ら。ろ。ろ。の。昔。の。花。女。い。何。ゆ。ゆ。今。の。花。女。い。三。つ。ら。い  
ろ。強。心。情。を。あ。ら。ろ。ろ。海。を。賣。る。の。と。あ。ら。ろ。ろ。あ。ら。ろ。ろ。あ。ら。ろ。ろ。あ。ら。ろ。ろ。  
御。室。よ。ろ。ろ。の。ゆ。ゆ。あ。ら。ろ。ろ。あ。ら。ろ。ろ。あ。ら。ろ。ろ。あ。ら。ろ。ろ。あ。ら。ろ。ろ。あ。ら。ろ。ろ。あ。ら。ろ。ろ。  
判。官。の。い。ち。ま。あ。ら。ろ。ろ。あ。ら。ろ。ろ。あ。ら。ろ。ろ。あ。ら。ろ。ろ。あ。ら。ろ。ろ。あ。ら。ろ。ろ。あ。ら。ろ。ろ。

へらへら。いふは是の人の花やめと白拍子とをいふのあらはれどその節操  
 の堅固なること今の花君の儔にあらざるや。あつはふと考ふるもの。曾我  
 十郎があのびくふ。虎がりて入通ひと彼物語小記に。いふこと。あつらひあふ  
 あり。仇人ふを放さる。謀ごまんとりあつたの好色を助るもの。辭言ごまひ  
 罵る。その東鑑の條をよくも見ざる。惑ひる。東鑑建久四年六月朔日  
 の條。曾我十郎結成が妾大磯の狂女。これを見ざる。こと。口状  
 の如し。若しその狂女の。間放遣され。平敷と。いふ。結成が妾。大磯の  
 狂女と。号ふと。記を。見て。今の花君と。いふ。の。異。こと。あり。あつ。世  
 狂女と。唱ふるもの。子。く。白拍子の類ゆ。て。酒宴。花真の。席。ふ。侍。と。い。ふ。様  
 朗詠。うんと。誦。ひ。あり。駭。の。人。の。花。び。と。ある。上。虎。あ。あ。れ。ど。身。を。い。兵。祐。成  
 ひ。と。ふ。ら。は。れ。ど。借。老。の。野。王。侍。う。と。い。ひ。え。ら。る。の。あ。れ。は。結。成。が。妾。と。虎  
 と。い。ひ。う。義。隆。の。妾。靜。と。記。せ。り。も。れ。小。因。ト。又。因。書。同。年。同。月。十。八。日。の。條  
 小。故。曾。我。十。郎。が。妾。大。磯。の。虎。除。髪。石。と。い。ふ。事。箱。根。山。の。別。當。行。実。修。小。か。い。て。佛  
 事。を。終。り。和。字。の。風。誦。文。を。捧。草。毛。の。馬。一。疋。を。牽。て。唱。導。の。施  
 物。と。い。ふ。件。の。馬。は。祐。成。が。最。期。小。虎。小。次。と。と。ろ。と。則。今。日。出。を。あ。を。逐。  
 信。濃。國。善。光。寺。へ。赴。く。時。小。歳。十。九。と。記。せ。り。又。曾。我。物。語。第。十。二。卷。に。  
 虎。は。祐。成。討。死。の。後。小。尼。と。あ。り。て。所。の。又。羽。を。業。内。と。い。井。手。の。を。取。  
 祐。成。の。最。期。の。迹。は。ら。わ。と。な。り。と。い。ふ。流。小。次。と。は。祐。成。の。妾。と。い。ふ。  
 清。み。ね。を。来。て。と。い。ふ。尾。花。が。袖。小。秋。風。ど。い。く。小。哀。れ。も。も  
 悲。し。かり。も。ん。今。更。よ。の。秋。を。吟。ぞ。れ。が。坐。小。次。と。い。う。落。て。禁。示  
 め。ぐ。じ。の。中。う。小。実。録。よ。あ。ら。も。又。尠。わ。ら。ね。ば。草。紙。物。語。あ。れ。が。と  
 て。誦。せ。る。又。又。う。と。い。う。の。作。を。物。語。の。今。の。作。り。物。語。と。い。は。

曾我物語卷二

五

大磯の扁 祐成が村死  
廿三日 舟と浪の如



わぐん虚実の只アスるもの。取捨よあらんり。さ向を物頑よ。あひ誘  
 たる入の動さんびりの狂女を今の狂君小引くべくて仇を討んとく  
 寤ふ士が。之を好て花街を通り。志も獨あんさるむさゆまの彼祐  
 子。いほも移れ下と。只目前の理を推さ。の才の短く入あめく。本石小あさど。  
 仇入の所在あらば。身を索ひめられる狂あさる。色を絶てえさるべぐん。  
 されい仇人の威勢ある。播神よ。あつも眼前よ。より。それがゆを致させん  
 り。さ女ごらの誘引ふま。小狂女向拍子をも嫌ふべぐらど。あつさ小虎へ  
 女流めれども。人をあるの才あれば。さあ。席もあさる。隨小祐成をひ  
 思つ。さこといふも。祐成は。れが。あふ志を揚さ。仇討小と。出の日ま。身の  
 大のを告され。今わらうと。あひ。後の恨も痛。い。れば。途より。後  
 希とゆ。さ。虎へ像見をか。り。て。又一。説小大碓の虎の相模。諸城

の里。さ。生れ。より。と。乳名を。於。鬼と。唱。後。上。亮と。改名。を。こと。い。ふ。  
 縁。故。を。解。ら。れ。於。鬼。の。異。朝。楚。國。の。方。ま。り。て。亮。の。ふ。又。諸。城。の。里。  
 諸。越。り。原。若。一。相。摸。の。名。所。を。和。歌。よ。い。の。諸。越。を。唐。山。よ。わ。り。て。諸。  
 も。ま。り。て。され。が。人。誓。言。あ。集。ま。り。一。あ。づ。ま。終。の。り。ろ。の。里。ま。り。て。た  
 つ。ま。ね。を。や。わ。ら。の。ご。ろ。由。と。い。ふ。らん。あ。の。ご。ろ。又。え。され。ど。を。さ。ら。く。は。好。む。  
 の。り。の。亮。と。い。ふ。名。小。附。會。と。て。乳。名。を。於。鬼。と。し。諸。越。の。里。の。う。り。ま。り。て。  
 と。う。う。と。い。ふ。の。ご。ろ。あ。り。ん。遣。る。物。又。記。し。を。え。ゆ。ら。ど。さ。と。彼。曾。我。見。方。  
 へ。南。茶。の。祖。大。臣。孫。原。朝。臣。武。智。實。の。四。男。が。參。議。後。三。位。を。廢。良。の。  
 後。亂。小。作。と。て。唐。良。より。十一。代。の。孫。伊。豆。國。押。領。使。維。繼。その。子。耕。野。  
 九。郎。維。次。その。子。俊。野。四。郎。以。夫。家。次。その。子。後。五。位。下。太。郎。大。夫。祐。家。定。入。  
 へ。又。津。見。八。道。寂。蓮。が。子。あり。祐。家。が。子。町。津。二。郎。祐。近。小。み。ら。む。三。人



あま河津太郎祐道祐真伊東九郎祐忠と大系國のええめれと東  
 鑑小由と死に伊東二郎祐親と子の河津三郎祐泰伊東九郎祐清  
 あり祐親入道河津河津の莊を祐泰小讓て與ふその身は伊東の  
 莊小居マコトバらめ小河津と稱し後まの伊東二郎とのみ又  
 大系國は祐真とのみりのを裁つたの祐信を賜りて信を真小作  
 ともや不審ゆれば祐成時常とて麻呂とて十五世相統の末は  
 又二孫祐強も母より家より出でて麻呂とて八代の孫遠江権守  
 の憲とらぬ木ユ又小補とられうか木ユのユと藤原の藤と合し  
 る孫ユ藤と号しる憲の孫後五位下時理その子維景  
 その子維職その子維次以上赤その子俊世に郎大夫と改その子  
 武者所祐次その子ユ藤を賜り尉祐隆その子を國門尉兼大和守

祐時乳母を大身丸とて王祐時の身六郎を御門尉祐長ホ一説は  
 維兼の兄駿河守時信とて一人伊豆國伊東に住とて伊東と  
 号すこれ伊藤工藤の祖とていれど大系國よりとらぬ時信の二階  
 堂の祖とてゆへ祐成時常の麻呂とて十七世相統の末はあま  
 ありある又按さる伊東守佐美河津の莊は伊豆國那賀郡小あり  
 北條と蛭小嶋の田方郡小属に蛭小嶋とて狩野川を渡りて  
 三嶋へ出づこの邊は狩野次茂光の居るあり又曾我の莊は相模  
 國足柄郡小あり鴨立澤へ遠め今大坂のゆるりも鴨立澤  
 と唱ふられど彼西行上人の秋の夕ぐれと詠するはの如しあはれ  
 又中村の餘綾郡小あり小坂と酒匂の間あり曾我の遠一昔  
 へ曾我中村とらるるて唱ふれば今の中村のりの中村小あり





質相と祿をらる。諸葛武侯の送物なれども。世に伯樂めらるれば。  
 馬骨のみ。馬の皮張る。えり。とりのものなり。されば中葉。周  
 唐の御心。侍れ。日。の世も安く。冬。の煖。夏。の涼。雪。のや。氷。のま。か  
 ら。び。し。も。愁。古。器。と。目。利。され。て。世。の。重。宝。と。なり。ゆ。て。び。ゆ。質。庫  
 の。穴。籠。屈。を。莊。子。が。所。謂。散。木。を。羨。め。り。も。その。ゆ。ひ。なり。と。べ。く。疋。鼓。の  
 原。軍。器。な。れ。ども。北。狄。の。樂。も。ら。ら。れ。る。を。用。る。は。ど。小。後。中。國。小。う  
 け。り。未。く。今。の。ま。る。べ。く。の。樂。器。と。なり。ぬ。ゆ。て。び。疋。鼓。の。殺。伐。の。声。あり。され  
 を。樂。器。と。さ。り。し。る。を。と。り。て。小。世。の。中。移。る。と。漢。の。博。士。の。咳。れ。ぬ。  
 され。ば。さ。も。上。古。の。僧。亦。は。疋。鼓。を。鳴。と。と。を。禁。め。ら。れ。たる。例。ゆ。め。んと。  
 今。小。至。り。て。是。非。を。論。ど。ぶ。も。あ。ら。ぬ。其。ゆ。り。諸。葛。武。侯。小。後。ひ。り。  
 夕。の。さ。る。も。些。を。さ。る。も。辨。た。る。各。位。の。い。つ。ふ。あ。り。ひ。あ。小。彼。割。去。極。之。漢

景帝の玄孫。中山靖王の後。後漢の献帝既。曹丕小殺  
 され。ゆ。ひ。漢。の。祿。の。絶。ん。と。を。悲。む。衆。小。推。す。ん。と。こ。と。を。は。え  
 天子の位。小。即。め。ひ。在。位。僅。一。二。年。ゆ。り。白。帝。城。ゆ。り。崩。と。ゆ。ひ。り。り  
 蓋。し。て。昭。烈。皇。帝。と。す。る。太子。劉。禪。ゆ。り。位。を。嗣。め。ひ。り。り。り。り  
 昭。烈。皇。帝。と。す。る。臣。黃。皓。木。を。籠。愛。し。て。遂。に。さ。び。ゆ。ひ。り。り。り  
 ま。う。れ。ども。漢。の。正。統。も。さ。る。も。な。れ。ば。後。帝。も。又。帝。禪。と。も。稱  
 と。ぶ。き。を。後。の。字。者。の。只。舊。而。文。あ。ら。ひ。て。改。め。ん。昭。烈。を。先。主。と。り  
 帝。禪。を。後。主。と。す。る。唯。綱。目。の。一。書。は。至。り。と。う。り。の。理。を。辨。て  
 漢。の。献。帝。の。末。に。附。く。後。漢。昭。烈。皇。帝。章。武。二。年。と。す。り。小。也。と。り  
 る。帝。禪。を。後。主。と。書。し。れ。ば。後。の。難。を。脱。し。と。り。れ。の。ち。え。小。至。り  
 づ。の。と。り。會。稽。の。楊。維。禎。が。正。統。の。辨。小。昭。烈。を。尊。む。と。り。理。義

楊氏が  
 正統辨  
 輟叫録  
 卷四  
 二

分明あり。より明の學士ホ。昭烈帝禪を天子の正統と定めたる。維實本が二國志演義より改りて蜀の先主後主の号。たる。夫主たる君よ次の稱を周礼よ主たる公々大夫をいふなり。又礼記礼運よ公よ仕るを臣とす。大夫よ仕るを僕とす。とらん。此の臣たる君よ對するの稱を僕とす。主よ對するの稱。これより日本の中宗より主後の稱あり。此より主後と主人僕後の略をまべ。天子よのち主後と稱せざるの謂なり。ゆれば玄徳の成都よ天子の位よ即ちひてこれを昭烈と謚す。惠陵のみさされ。葬りて初。敗績する。帝禪ハ魏よ降する。安樂公よ封じられ。地を失ふの君。成敗よ就たる帝と稱するの義あり。ゆめりものあり。魏ハ漢の賊なり。後せり。彼が封爵を賜ふ。帝禪を安樂公とす。亦彼曹丕が献帝を推あり。山陽公よ封じよある。只その謚あり。亦ゆめり帝禪と稱するなり。これを後主とす。ゆめり稱せざる。ゆめり晋の陳壽が二國志を撰む。先主後主の名を創り。ゆめり常璩が蜀志よゆめりゆめり。ゆめり陳壽が二國志よ。鍾會が蜀將を會する。裕よ昭烈帝を賤して。益別の先主とす。ゆめり。先主の名より。晋の魏を替ふ。果を亡して。二國を并し。ゆめり。天よ西の日あり。地よ西の皇あり。ゆめり。晋よゆめり。何れゆめり。今千載の後。ゆめり。稱よゆめり。ゆめり。又漢を改め。蜀とす。ゆめり。陳壽がゆめり。黃氏が日抄よりゆめり。蜀ハ地の名あり。國の名あり。ゆめり。昭烈帝ハ漢とす。稱よゆめり。蜀と稱よゆめり。孫權とあり。魏

正統

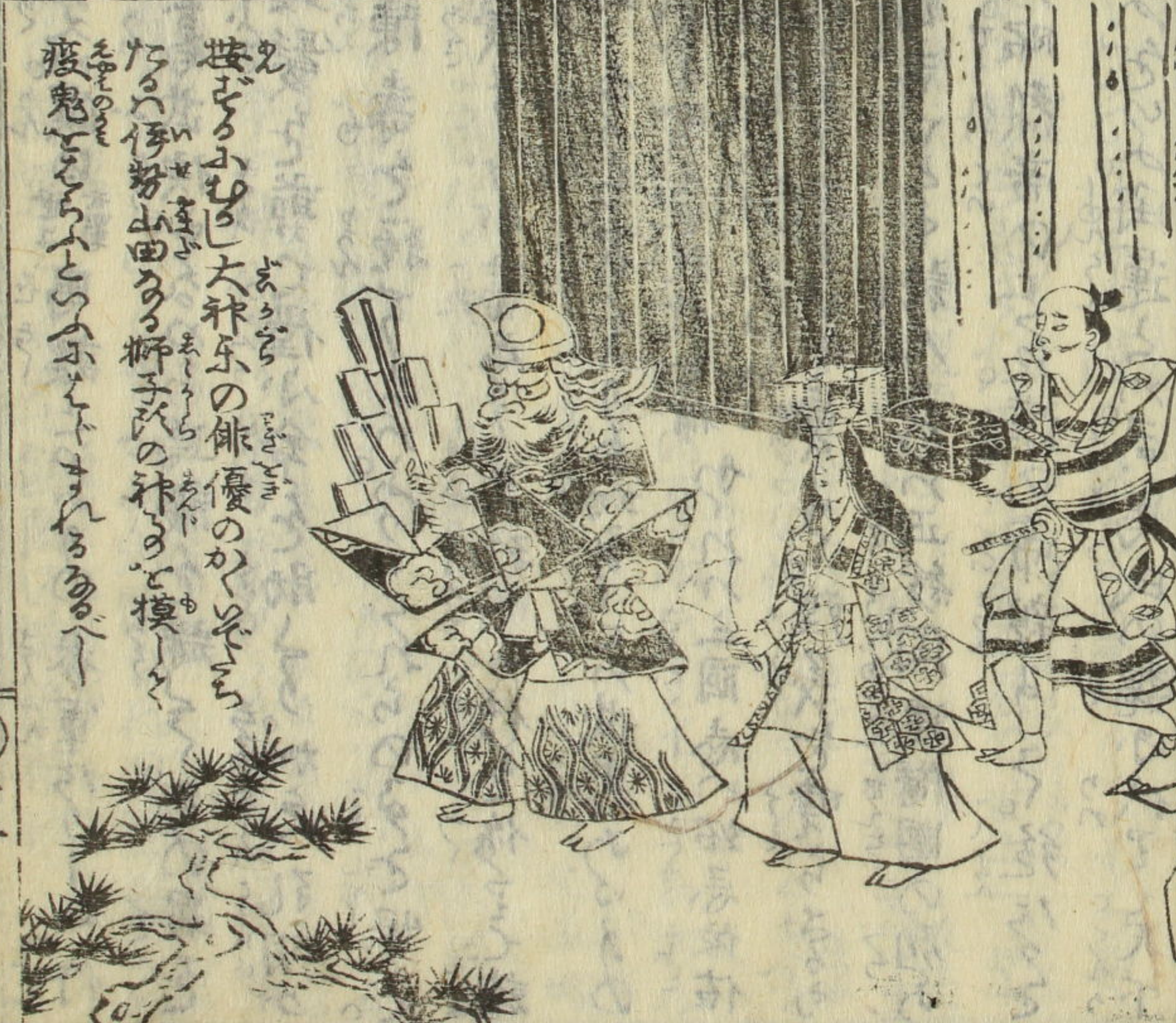


賊を討んと盟ひぬひしとも漢とてを稱あひよられしを蜀といふ  
 魏人のみならず彼昭烈皇帝の漢を嗣承しを憎む故に今  
 劉氏漢朝の正統を絶つて自ひ漢といふことと忘て蜀といふ名つけしを  
 後の文人墨客の陳壽が當時より阿枉なるを曉らざり杜子  
 美が詩といふものあり蜀主と稱しなむといふ義は仕理を知るの學  
 者といふべし明小至アアアアアこの理を曉るといふものあり蜀  
 漢と唱りあり前漢後漢小紛まんとて厭つ漢末とも李  
 漢とも稱しとべしこれを蜀漢と稱するといふ謂ふこと五十歩  
 を以て百歩と笑ふの惑ひあり今の君も曹氏魏司馬氏晋の臣小  
 あらど況して日本人のやうにどちをまは稱し魏と晋と阿狹く漢を  
 賤く蜀と名けしを先主後主と稱する抑誰かあるや漢の所  
 書を誦むりのいさろいべしとてかされ彼綱目小帝禪を後主と  
 るを姚燧といふ博士のいさろ非をたり又諸葛孔明の書翰小  
 先主と稱するものを原本の先帝とありしを晋は傳つた先主  
 と改めたり杜微が傳ふ孔明の書を戒て帝禪の事をさへん  
 更に朝廷の主公今年始十八とあるを朝廷と稱する主公といふ  
 道理あり後人の加筆せし疑ふべし以上顧炎武が説く愚按を雜識 國志を  
 みるに陳壽の字を兼祚といひて巴西安漢といふところの人あり  
 少ありしとて譙周を師とて漢小仕を觀閣令史といふ職を授  
 かる父の妻小疾ありし婢小を丸せうたりし郷黨の幾をうり  
 され小せでられ累年亦令落ちられとも晋張華その才を愛して  
 孝廉小舉しを佐者作郎よりうりふられゆき國志を撰む

書を誦むりのいさろいべしとてかされ彼綱目小帝禪を後主と  
 るを姚燧といふ博士のいさろ非をたり又諸葛孔明の書翰小  
 先主と稱するものを原本の先帝とありしを晋は傳つた先主  
 と改めたり杜微が傳ふ孔明の書を戒て帝禪の事をさへん  
 更に朝廷の主公今年始十八とあるを朝廷と稱する主公といふ  
 道理あり後人の加筆せし疑ふべし以上顧炎武が説く愚按を雜識 國志を  
 みるに陳壽の字を兼祚といひて巴西安漢といふところの人あり  
 少ありしとて譙周を師とて漢小仕を觀閣令史といふ職を授  
 かる父の妻小疾ありし婢小を丸せうたりし郷黨の幾をうり  
 され小せでられ累年亦令落ちられとも晋張華その才を愛して  
 孝廉小舉しを佐者作郎よりうりふられゆき國志を撰む

大神宮大神樂獅舞圖説

今いまの獅子舞しし舞漢かんの諸葛孔明しよかくわくめいの  
 上うへの孔明南蛮くわんめいなんばんの  
 孟獲まうかくと攻こうりししる獅子ししをを後のちの  
 中人ちゆうじんと入いれて進退自在しんたいじざい初はつ極ごく面めん貌ぼう  
 猛獸まうじゆうとともも退たいけりけりとといいふ  
 今いまの獅子舞しし舞漢かんの諸葛孔明しよかくわくめいの  
 上うへの孔明南蛮くわんめいなんばんの  
 孟獲まうかくと攻こうりししる獅子ししをを後のちの  
 中人ちゆうじんと入いれて進退自在しんたいじざい初はつ極ごく面めん貌ぼう  
 猛獸まうじゆうとともも退たいけりけりとといいふ  
 昔むかし物語ものがたり云いふは大神宮おほいみみやう  
 御ご杖しやう大神おほいみみやうととくく毎日まいにち江え中ちゆうにに俳はい  
 細こききるる中ちゆうのの鼻はな高たか假かり面めんとといいふ  
 下したのの直ちゆう年ねんとと被かてて白しろ袴はかまとと穿き穿き  
 御ご幣へいとと持もちち先まへへへままるるそのその次つぎ小こ  
 十四じゆうしゆ五ご歳さいとといいふは男おとこ童ちゆう瑠る落らくとと  
 つつららにに長ちゆう絹きゆうとと被かてて白しろ袴はかまとと穿き穿き  
 穿き穿き中ちゆう啓けいのの扇あふぎとと鈴すずとと左ひだり右みぎ小こ  
 ののちちららててののちちらら三さん番ばん小こ麻あし上うへ下した  
 穿き穿き男おとこ箱はことと持もちち四よ人にん小こ布ふ  
 衣いのの裏うら表あへとと男おとこのの次つぎ四よ足あし  
 附つくく大おほ長ちゆう袴はかまのの蓋ふたとと取とりりてておおのの  
 ののははてておおのの上うへへへ獅子ししのの次つぎとと  
 是こゝにに大おほ鼓つづみとと一いつ万まん度どのの御ご杖しやう  
 とと中ちゆうのの中ちゆうにに並ならびびてて御ご幣へいととままいい長ちゆう袴はかま  
 穿き穿き或あるはは女め人にんととかかつつ白しろ袴はかまとと穿き穿き  
 帽ぼうし子ことと被かてて白しろ袴はかまとと穿き穿き左ひだり右みぎ小こ  
 つつららにに笛ふえ小こ鼓つづみ打う拍はく子こ  
 ちちららののちちららにに瑠る落らくとといいふは  
 男おとこ童ちゆう神かみ楽がくとと舞まいい拍はく子こ  
 小こ意いとといいふは感かんとといいふは



昔むかし物語ものがたり云いふは大神宮おほいみみやう  
 御ご杖しやう大神おほいみみやうととくく毎日まいにち江え中ちゆうにに俳はい  
 細こききるる中ちゆうのの鼻はな高たか假かり面めんとといいふ  
 下したのの直ちゆう年ねんとと被かてて白しろ袴はかまとと穿き穿き  
 御ご幣へいとと持もちち先まへへへままるるそのその次つぎ小こ  
 十四じゆうしゆ五ご歳さいとといいふは男おとこ童ちゆう瑠る落らくとと  
 つつららにに長ちゆう絹きゆうとと被かてて白しろ袴はかまとと穿き穿き  
 穿き穿き中ちゆう啓けいのの扇あふぎとと鈴すずとと左ひだり右みぎ小こ  
 ののちちららててののちちらら三さん番ばん小こ麻あし上うへ下した  
 穿き穿き男おとこ箱はことと持もちち四よ人にん小こ布ふ  
 衣いのの裏うら表あへとと男おとこのの次つぎ四よ足あし  
 附つくく大おほ長ちゆう袴はかまのの蓋ふたとと取とりりてておおのの  
 ののははてておおのの上うへへへ獅子ししのの次つぎとと  
 是こゝにに大おほ鼓つづみとと一いつ万まん度どのの御ご杖しやう  
 とと中ちゆうのの中ちゆうにに並ならびびてて御ご幣へいととままいい長ちゆう袴はかま  
 穿き穿き或あるはは女め人にんととかかつつ白しろ袴はかまとと穿き穿き  
 帽ぼうし子ことと被かてて白しろ袴はかまとと穿き穿き左ひだり右みぎ小こ  
 つつららにに笛ふえ小こ鼓つづみ打う拍はく子こ  
 ちちららののちちららにに瑠る落らくとといいふは  
 男おとこ童ちゆう神かみ楽がくとと舞まいい拍はく子こ  
 小こ意いとといいふは感かんとといいふは

あつるより陳壽が父の漢の馬謖せまとりの参軍なりし小作せうさくの馬謖罪有るれば諸葛武侯とるり馬謖を誅すその罪をつと糾す又陳壽が父の頭髮を剪て僅小命を助す加え孔明が子の諸葛瞻の常は陳壽を殺すべしとらるるを恨て漢をわびて賤しう漢まじく書あつし又孔明が信を信して諸葛亮の連年衆を動しうがら家より功あり武畧ありのつと不あふんと後世しんしゆ晋書又出又世茂新紀補しんしゆわれば之國志の拓忌依依の筆ふ成るりのるれどその文をの愛しう理を曉らざるもの多かり縦通俗之國志とも誦りりの正統周連橋國の別ありをあるべし正統と昭烈帝のとら漢の帝親あり経たるをつと魏賊を討めりをの周運と司馬氏の魏小代りて天下

を有るいふれを正統とらるるの漢の祚を憂たるはわらぬその奸悪の曹操又子小芳らとされ天少を有ふ及て世上一日も妻りらるる故よられを周運とら又周國とら曹操が奸雄ゆ漢室を倒し曹丞に至りて献帝を追ひ失ひ天子の位を公家といふも全く四海を有る故よられを周國とら殷の夏小代りて立丹の殷小うりて立漢の秦楚を討滅し立先武の王莽を誅して立昭烈の曹操を討し西川に帝たむらるる正統の天子とらるるべしあふれ魏の漢の賊なり晋の魏の悪よ代るりの多論する小なるはしんしゆ又上金墜敷大日本神代より百方載の今に至りて革命の時あり萬國の中又有るもいと貴れ大御國とられば他の國よりはへかど頼朝卿武家の棟梁とら六十餘國の摠追補使となり





成敗はちさうひつ。理安ふらうを苗じの稀七。後鳥羽院のうふ  
 けて北條義時を滅して世をむのぶる。病をふと思食たり多ひよ  
 けれど後ひちの武士の多ゆらぬ。北條が武運のまごふ。小盡どのひが  
 ひあうら負あひつ。二皇あめく。遠く嶋へ一けられぬひよれば美  
 久記を読みの只顧後鳥羽院のうらたそとのどあうとさう。かく  
 多時より八世の孫高時入道が時小至して後醍醐院満より後  
 鳥羽院のめん志をほごせぬ。高時を誅滅しつ。じうの世よあさや  
 ころ。そのすあめひ起をせぬ。後一旦沈落ちぬ。かよ北條が武運  
 こ小盡らんばつ。程もあう。御本意を遂ぬる。是後鳥羽院の慶喜  
 短く。後醍醐院の謀畧長さをあめめ。成と敗る。時運  
 小あめめ。太平記を読みのみ。小帝の思召たりあう。とあ

後鳥羽院を不もら。又後醍醐院をも不もら。べらふら  
 り北條の意をとめ。後官軍へ意をうらめ。その成敗よの眼う  
 けり。理安のうらふ。又むつら。故軍記小後鳥羽院の多時を亡  
 さんとむが。石ころあめめ。龜菊が諍訴よ起れり。この  
 義時をくまけたら。この君来武を好せぬ。かん奉勤を推  
 量るよ。このむより。忠食たりあめ。このあれ。了も。実朝公をい。爵  
 位討よ。思でんこと。又祖あ。こえ。右大臣よりあひ。小彼え人の  
 議論よ。ひひ。南朝のうら。をまう。後醍醐院。多義貞朝臣  
 を征夷大将軍ゆ。更利殿を討。あ。忽北岳の衛を失ひ。く  
 親王御北越の雪。寧波のふ。や。多員陣没。あ。か。も。新田  
 殿の子孫を大将軍と。楠公の子孫を副將軍と。あ。その武威

母のつらら振ひて。牛角の合戦いどべり。は南朝の公卿との理をばり  
あかしの原先帝のちがひ言にせのふら。朝敵一統の世よりうらんと  
あひしらふと。も親王あらむの將軍ありあり。あかしの南朝の  
武士の忠義の謀略も京家の武士は猶も威あり。権あり。あ  
まの夢のあひひけ。と首より。果敢と。た。た。い。ど。ど。ど。い。と  
ま。い。ら。ぶ。中。扇拍子をとり。びり。と。と。和。漢の今。ひ。を。明。白  
小説論。も。その論究めて高。り。れ。が。呼。と。感。ず。る。の。の。稀。め。稀。幻。を  
う。も。つ。ら。く。近日の新作ある兼好法師が彼然草を。荒。く。う。ま。い。あ  
の。あ。り。て。骨。く。ら。う。う。和。ら。れ。る。と。女。の。声。り。と。咳。あり。破。云。は。對。ひ。さ  
欠。ど。る。の。り。柱。よ。う。く。れ。と。晴。る。ゆ。め。れば。陣。大。鼓。の。拍。子。ゆ。あ。く。く。舊。の  
如。へ。轉。び。入。り。ぬ。

第五 俵孫太龍宮入の弓袋の上

叔の次へ。ゆ。る。の。の。黒。く。も。搦。ま。り。答。書。は。け。の。玉。の。跡。の。と。高。く  
え。え。く。俵孫を秀乃御朝臣龍宮入の弓袋と一行あを。写。した。その  
と。死。件。の。弓。袋。の。袋。の。中。う。と。跳。び。た。を。え。え。く。右。を。え。え。く。答。書。附。に  
分。明。な。れ。ど。傳。束。帙。を。失。ひ。と。れ。ば。あ。は。疑。ふ。の。の。ゆ。め。の。ゆ。め。抑。々。主  
と。頼。ま。な。し。秀。乃。御。朝。臣。の。世。小。く。さ。ら。な。り。と。と。あ。れ。ば。あ。は。その。武。勇  
を。高。く。せ。ん。と。後。人。蛇。足。の。説。を。添。え。た。と。の。傍。痛。さ。世。俗。の。常。に  
陰。囊。も。隨。重。床。の。力。り。り。と。似。れ。る。も。あ。る。圓。居。小。刻。に。結。故。を  
あ。ら。さん。と。と。と。を。頭。と。あ。る。世。俗。の。を。と。ひ。ひ。ひ。て。と。と。怪  
だ。ん。評。は。て。り。り。を。首。畧。と。と。あ。い。わ。ん。め。書。ゆ。い。く。兼。平。の。年。間  
俵孫を秀御只ひのり。勢。田。の。橋。を。渡。る。あ。長。二。丈。を。あ。り。い。ふ。あ

大蛇橋の上へ横りりて卧たり。秀御らんを物ともぞん彼大蛇の首上  
を踏て。徐中へ。論はれば大蛇忽地小男とありて。未乃御のまゝ小男  
さしてのめき。其年未乃貴賤性未の入を。試るよ。小辺が如死剛あるの  
あり。これに後來地を。争ふ大敵あり。これを討てなむとて。いそ  
秀御一談小も及ぶと。仔細いり。と領議し。この男を先小立。湖水乃  
浪をこら水の中へ入ると五十餘所あり。一の樓門あり。内へ入ると  
溜瀾の法金玉の整奇麗。莊親言。紫の盡るんと。朱門高窓帝  
王の百石城小まり。たす。か。と男まづ内へ入ると。衣冠を。甚。秀御を  
客位に請ゆるよ。た右侍備の官あり。袖を列る。これを歎待り。と  
酒宴既。又。蘭中。と夜。と。帯。よ。れば。衆皆。と。敵の寄。未。な。ん  
た。り。あり。ぬ。と。周章。と。秀御。へ。一生。涯。身。を。放。さ。せ。り。と。を。る。

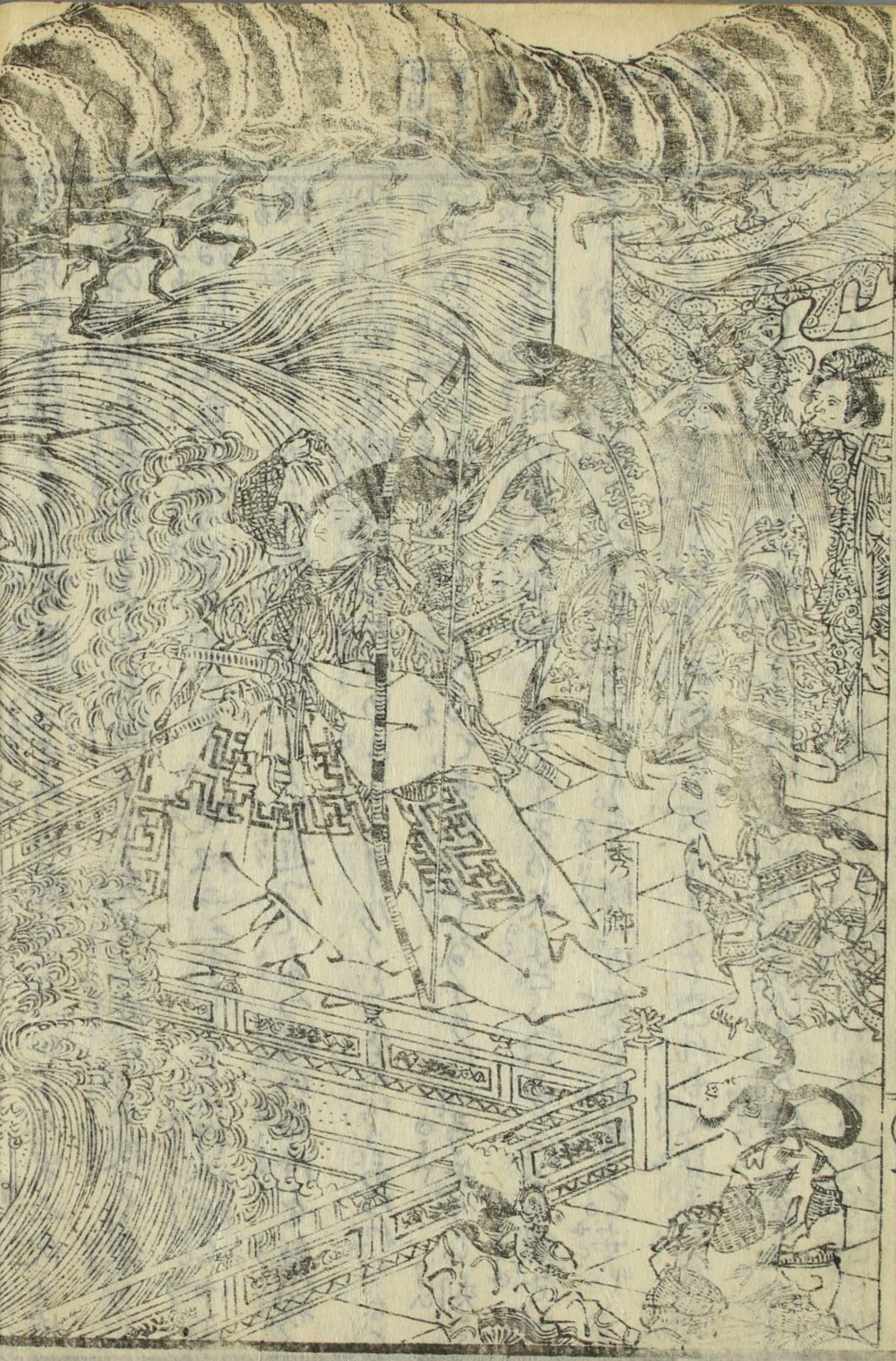
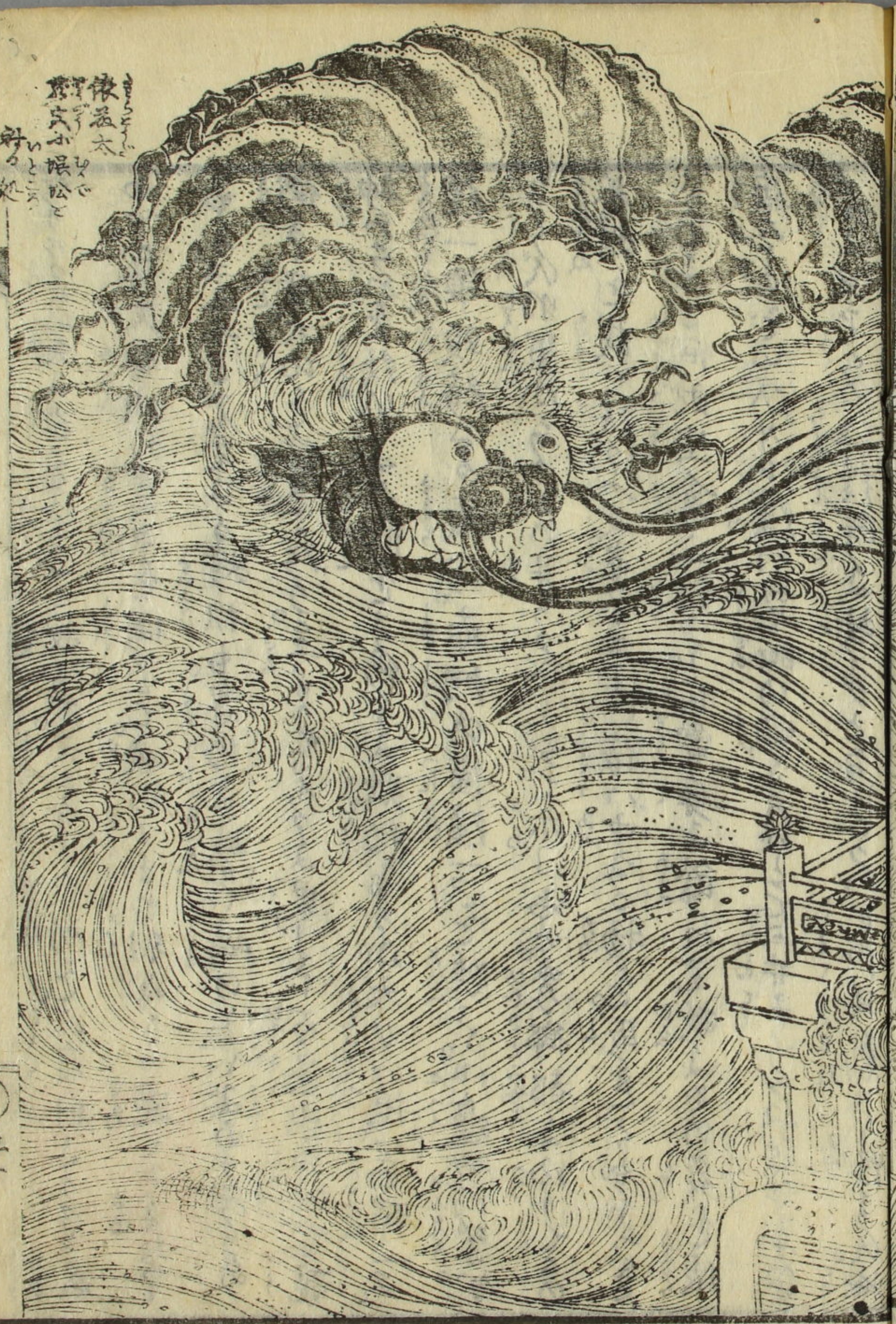
五人張小せん。發り。り。と。雷。混。し。二年竹の節近る。を。十五束。三伏。と。指  
と。旗の中根を。若本。ま。ま。ら。ら。徹。し。たる。矢。只。之。條。を。手。扱。く。今。り。く。  
と。約。程。よ。比。良。の。高。峯。の。く。う。を。焼。松。二。三。千。を。と。二。行。小。燃。し。中。小  
鳴の如く。ある。り。の。ら。の。龍。宮。池。を。う。て。近。つ。た。ま。つ。物。の。形。体。を。熟。視。す。  
小。二。行。よ。燃。せ。る。焼。松。に。彼。が。左。右。の。ま。よ。と。り。たり。と。え。え。たり。あ。れ。と。い。ふ。  
百足の馬蚊の化たり。と。さ。ら。の。ゆ。て。夫。比。ち。う。う。あり。たり。は。弓。矢。う。ら。刺。さ  
り。た。り。眉。間。の。真。中。を。射。し。う。ら。り。よ。その。矢。よ。ご。い。は。れ。れ。ど。鐵。を。射  
る。よ。く。は。え。て。苦。を。く。く。と。ま。ま。ら。ら。秀。御。一。の。矢。を。射。損。と。て。女。の。は  
あ。ひ。ら。が。二。の。矢。を。刺。し。る。が。夫。所。を。射。し。り。り。と。これ。も。又。身。を。ま。た。り。と。い  
む。と。さ。の。矢。今。い。と。や。一。條。よ。う。り。ぬ。り。小。じ。ん。と。あ。ひ。ら。が。倍。と。葉。ト。出。し  
たる。が。あり。と。この。度。射。ん。と。と。夫。頭。小。唾。を。吐。を。と。せ。り。夫。所。を。射

俗間往住  
百足と馬  
蚊を馬蚊  
と誤る  
姑原本  
のまじり  
勝年下

御  
大  
小  
松  
竹  
山  
水  
景  
物  
大  
本  
山  
景  
物  
大  
本  
山  
景  
物

大  
本  
山  
景  
物  
大  
本  
山  
景  
物

七



賀  
屋  
景  
物  
大  
本  
山  
景  
物

八

たり。矢を毒を塗る故。又矢所を二度射たり。此ゆへに夫肩間の真中を徹して喉の下まで羽ぬら逼る。立ちたる。二三千と見えたる焼松も忽ち滅す。鳴のふくはあり。倒る音大地を響きたり。是より果して百足の馬鞍を龍神らんを致して。秀乃御をさめく。又歎給あり。大ク一振。巻絹一ツ。鎧一領。頭結る。儀一ツ。赤銅の撞鐘一ツを撃る。此邊の門茶。る。大物軍小る。其の妻。る。秀乃御。秀乃御。秀乃御。巻絹を截して。其の妻。る。秀乃御。秀乃御。孫を。この怪。此

徐の虚実の俗説辨といひ。の。粗裁たり。湖水の底は龍王城の。説辨を。現る。我が十郎の小袖は。新の。の。切。講評を。皆。詭。質。屋。庫。卷。之。二。終。



